

## 八女の邪馬国王の卑弥呼が共立されて邪馬壹国王

神尾忠和

**1 要旨** 『魏志』などの中国で記録された古文献の文字は漢文で記録されており、漢音や呉音で発音するのは当然であるが、東北アジア地方には支那語族よりも朝鮮語族（ツングース語・満州語・高句麗語・韓国語）が多いのであるから、これらの言語での探求が必要である。

**2 はじめに** 後漢の力は楽浪郡を通して倭の国々におよんでいたが桓帝・靈帝の時代になるとその勢いは衰弱してきて、楽浪郡との交流も絶えていった。このために倭の国々の王たちは自分の領域を拡げていく行動に出たのである。それは水稻耕作の用地獲得や拡大に伴って小国どうしの争いや、朝鮮半島からの渡来人などがあり、倭国の大乱となったのである。これを統率したのが伊都国の王である。「皆を統して女王国に属す」とあるように、武力を持たない「祈祷師」の王に、狗奴国以外の三十五か国の国王が「属」したのである。

### 3 邪馬壹国は八女市祈祷院字白石である

祈祷師をツングース語でサマ（s a m a）と発音し、韓国語で「邪馬」と漢字で表現する。邪馬国は「其の餘の旁国」の中にある国で、この国王が卑弥呼である。三十五か国の王から共立された連合国王であるから原始国家における王のえらび方である。この連合国が邪馬壹国であり、その朝廷は邪馬国の建物を使い、邪馬国の女王卑弥呼を連合国邪馬壹国の王としたのである。邪馬国の邪馬は「祈祷師」の意であり、壹は「王」の意味であるから連合国邪馬壹国とは「連合国祈祷師王国」の意味となるのである。邪馬は呉音でヤメ（y a m e）と発音するので現在の八女市にその名をとどめているのがわかる。

八女市に祈祷院という町名があり字は白石である。卑弥呼が死んだときに「殉葬する者、奴婢百余人」とある。邪馬壹の壹は祈祷院の院と同音であり、白は百と発音が同じであるから、卑弥呼の冢の近くに墓石を百余人分建立した事を言っているのである。

#### 4 伊都国は渡来人上陸作戦の橋頭堡の意である

伊都の伊には「万事を調和する人物を示す」という意味があり、都には「あつめる。あつまる。統べる。多くのものを一つに集める。また、集めて統率する。その役目」という意味がある。「統べる」の意味に「いとぐち」というのがあり、この「いとぐち」の事を「端緒」という。韓国語で「端緒」をシールマリ (s i l m a r i) と発音するが、(l) 音と (r i) 音は日本人には発音できないし聞き取りもできないのでシーマ (s i m a) となり、志摩という漢字で糸島半島の西岸に地名として残っている。

シールマリは「事の始まり。糸口。手掛かり」の意味で、シールは「糸」の事で、マリは「頭」の事ですから「統べるための拠点として物事の最先端に手掛かりや足場を確保する」必要がある。その拠点を「橋頭堡」というのである。橋頭堡とは「渡河・上陸作戦の祭、その拠点を確保し、後続部隊の作戦の地歩を得るための拠点」である。朝鮮半島から多くの侵略者が上陸した所が志摩である。

侵略者が縄文人・弥生人を倒して前線基地としたのが前原である。「前」は韓国語でアプ (a p) と発音し、意味は「前方・将来・前途・取り分・分け前」である。「原」はバル (b a l)・プル (p u l) と発音し「国」の意味であるから、「統べる人の取り分の国土・分け前の国土」という地名になったのである。末羅国は、侵略者によって官も副官も無く、自主権もないほどの末路国という意味の国名になってしまったのである。

伊都国の王は爾支であり「爾」は「ジ・ニ」と発音し「近くにいる相手をさす第二人称のことば」である。韓国語では支を「チ」と発音し「官」の意味であるから、爾支とは「卑弥呼の近くにおいて魏や朝鮮半島の情報の授受」を担当したのである。それらの情報を連合国全体で共有するための各連合国への指示したのが一大率である。一の意味は「全部をひとまとめにする。ひとつにする。」であり、大は「達」と同音であるから「差しさわりなく進む。途中でつかえずに行きつく。すぐれていてなんでもこなせる。」の意味で、率の意味は「はみ出ないように、まとめて引き締める。ルートからそれないようにする。」であるから、「皆を統して女王国に属す」の役目をにしている事がわかるのである。

## 5 卑奴母離と男弟との関係

副官を卑奴母離と言い、卑は卑弥呼の卑であるから「稀」である。奴は中国語でド・ヌと発音し、韓国語でナ・ラ・ノと発音する。母は中国語でブ・ムと発音するので、奴母は「ナム・ノム」と発音することができる。韓国語にナムラダという語があり（ラダは接尾辞）、意味は「しかる。とがめる。戒める」である。日本語に「のむ」という語があり、意味は「祈（の）む。頭をたれていの（祈）る。」である。また「祈」は「のみ」とも発音する。

『風土記』に「昔、纏向の日代の宮に天の下を治めになった天皇が行幸された時、この里に土蜘蛛が三人あった。この人たちは堡を作って隠れていて、降伏することを承知しなかった。そのとき侍臣の紀直らの祖釋日子を派遣して誅滅させようとした。ここにおいて三人はひたすら叩頭（のみ）して自分たちの罪過を詫び、ともに再び生きられるようにと乞い願った。」とある。中国にも「三拝九叩」の語があり「三度拝し、九度頭を地につけて最敬礼をする。」という意である。

祈は（のみ。のむ。なむ。）と発音するので「奴母」の語を用いたのである。卑奴母離の離（り）は、祈を「いのり」と発音した時の接尾辞であるから、卑奴母離とは卑弥呼を師と仰ぐ祈祷師である。

卑弥呼には「夫婿無く、男弟有り、佐けて国を治。」とある。「男弟」は他にも須田八幡宮の人物画像鏡銘文に「癸未年八月日十大王年男弟王」とある。この語は韓国語で解明出来るのである。「十大」はヨルダ（y o l d a）と発音し「ひらく。はじめる。あける。蓋をあける。道を拓く。関係を結ぶ」であるから、日十大は「日を開く」の意味となるのである。「王年」の王は韓国語でワングと発音し「往」と同音であり、意味は「行くこと。これから先」である。年はヨン（Y o n）と発音し「念」と同音であり「おもい。考え。気持ち。気を付けること。深く思うこと。深く望むこと」という意味である。

「男弟」の男は韓国語でナム（n a m）と発音し、これと同音の語に「他人。残る。余る。あとに留まる。後世に伝わる。」と云うのがある。弟はテェ（t h e）と発音する。この発音と同じ語に「祭」がある。祭の意味は「神霊を慰め祈願する。奉祀。供え物や祭壇を清める儀式を行い、神霊をまつる」であるから、男弟とは「あとに留まって奉祀する」という意味である事がわかるのである。これらのことから卑弥呼の弟ではあり得ない。地方の祈祷師である卑奴母離と、連合国の祈祷師王である卑弥呼とを結び奉祀する役割の人なのである。

## 6 神日本磐余彦は韓国語発音の漢字文字である

日本書紀にある神日本磐余彦をカムヤマトイハレヒコと読むのは倭人語である。倭人語は朝鮮族語の発音や意味を漢字で表現したものであるから、中国語のみでは解読できないのである。

神はシンと発音する。朝鮮族語でシンハンと発音する語があり「大王」の意味を「臣王」と漢字表現するのである。この発音は「臣韓・辰韓」でもあり「大韓」でもシンハンなのである。シンハンの部下に五大臣を置き首席大臣をシンカ・シンチと言ひ『高麗史』に「神誌」秘詞とある所の「神誌」をシンチと発音しているのである。このことから「神」には「大・臣」の意味を有することが分かるのである。

『魏志』韓伝に臣蘇塗国とあり、シンスド国と発音し、森林神壇の本宮のことである。この本宮には天神（ハヌニム）という祭主が居て各地の首領を呼び集めて神託を述べたり、首領たちの話を聞いたりしており、首都とか朝廷と言われていたのである。蘇塗とは神籬（ひもろぎ）のことであり、臣蘇塗国とは「大神籬国」の意である事がわかるのである。

信仰の対象は「巨石」や「大岩」にもあり、これを磐座・岩座（いわくら）と言ひ、岩神壇であるから、渡来人たちはこれを「岩塗」と考えたのである。本宮の「臣岩塗」には祭主である天皇がおられますので、これは「大岩塗」ということになるのである。

岩はガン（g a n）と発音するが、韓国語では語頭の（g）音を発音しないのでアム（a m）の発音となり、塗はト（t o）の発音であるから「岩塗」はアムト（a m t o）と発音することになるのである。

渡来人であればm音とt音の子音が続いても発音したり聞き取ったりすることが出来るが、日本語では母音が必要であるのでアマト（a m a T o）の発音となる。「あまの岩戸」の（あま）がそれであり「天」の「あま」ではないのである。岩戸は岩塗の発音を表現したものである。韓国語では、ア行音はヤ行音に音韻変化しやすいので、アマト（a m a T o）はヤマト（y a m a t o）に変化するのである。

韓国語のアムトが日本語のヤマトに変化したので、天皇のいる所を漢字で表現する漢字が存在しないのである。「魏志」倭人伝には倭人国とか倭国とあるので、ヤマト（岩塗）を「倭」で表現したのである。記紀が成立した頃には「大岩塗」を「大倭・大日本」と表記して「やまと」と発音したのである。

倭は韓国語でウエ（w e）と発音する。これと同音の語に外がある。韓国で外人といえば「部外者、管轄外の人、敵対する人」の意味であるから

倭人も同じく「部外者、管轄外の人、敵対する人」の意味となる。ハングル文字での発音記号は「倭」が(oe)で「外」が(o i)である。新羅の郷歌である「慧星歌」に「倭理叱軍」とある。これはオリクン(o r i t K u n)と読み、「倭理」が倭で「叱」は(t)音であり「倭理」と「軍」との複合名詞に介入する連体助詞である。新羅時代には倭国をオリ(o r I)と呼んでおり、o r iの(r)音が脱落してo iになる。これが外のハングル文字の発音記号(o i)なのである。発音は外も倭もウエ(w e)である。外の意味は「ある範囲のそと側。また、その表面。遠い地方。仲間ではないと思う。それ以外のもの」である。

倭理のオリ(o r i)には「瓜」や「鴨」の意味もある。瓜の日本語発音は、韓国語のオリがウリ(u r i)に変化したと「満鮮植字彙」にある。ウリ(u r i)のr音が脱落してu iとなり、発音はウイ(w i)である。

韓国語でウイ(w i)と発音する漢字に「委」があり、意味は「上、表面、頂上」である。『通典』に「倭面土国」とあり、金印の「漢委奴国王之印」の委奴(ウイラ)にも用いられている。倭も委も外と同じ意味であるから、「外面土国・表面土国・ある範囲の外側国・漢の管轄外の国・海の表面上の山島国」と表現してあるのである。景初年間に公孫淵を誅殺するまでは、漢にとって倭人国は外人国(部外者国)であり、遥かかなたの絶域の、海の表面に浮かぶ小島群の国なのである。

倭理(o r i)には「鴨」の意味もある。葛城の五社と言われる神社に鴨の名を持つ神が鴨都味波神社と高鴨神社である。倭理は鴨であり大倭でありヤマトであるから鴨都味波神社は「ヤマト三輪神社」と言っているのである。また、高鴨神社の高は韓国語でクダ(k k u d a)と発音する。これと同音の語に「大きい」があるので、高鴨とは「大倭」の語を表現しているのである。磐余の余は韓国語でもヨ(y o)の発音であり、如と同音であるから磐余とは「磐の如く」の意であることがわかるのである。

## 7 おわりに

これまで見てきたように、漢文で書かれた古文献の名詞に関しては韓国語の音や訓を用いて解読できることを確認してきた。最後になったが崇神天皇は任那から渡来した人である事を述べる。

崇神天皇は、御間城入彦五十瓊殖という日本語で表現してあるが、語源は韓国語である。御間城はミマキと読み、弁韓加羅の任那(ミマナ)のことである。城は土偏と成(ナリ)であり、城をナリと読むのである。那もナリと読む。任はイム(i m)と発音し、那はナ(n a)であるからi m n aとなる。m音とn音が子音であるから中間に母音のa音を入れてi m a n aとなる。

任は呉音でニム（nim）であるから任那はnimanaと発音し、音韻の変化でmimana（御間城）となったものと考えられるのである。

韓国語でイム（im）と発音する語がほかにもあり、意味は「君臣・親子・師弟・親友・愛人・愛人など慕わしく想う相手の称」であるから、任那とは「親友の国」と言っていることになるのである。

入（iri）は韓国語で「狼」の意であるから、その発音を「大神」に用いたのである。五十瓊殖はイニエと発音している。イは移と同音であり、ニエは韓国語で「稔」と同音であるから、イニエは「移稔」の事である。弁韓加羅の「任那から倭国へ移り稔る」であり、その結果が崇神天皇として稔ったのである。

以上のように漢字表現の古文献の名詞は、韓国語の音や訓を用いて解説することが出来る事を確認した。

日韓・韓日小辞典	白帝社
漢字でわかる韓国語入門	祥伝社
日本語の源流をさかのぼる	徳間書店
韓国古地名の謎	學生社
シャーマニズム	中公新書
古代の東アジアと日本	教育社
朝鮮上古史	緑蔭書房
日本の古代1 倭人の登場	中央文庫